

ひきこもりの当事者と周囲の関わり方について 考えた研修会(高知市の県民文化ホール)



「生きようとする声聞いて」

ひきこもり理解へ研修会

高知市

子育て支援などの一環として、ひきこもりの当事者と大人の関わり方を考える研修会がこのほど、高知市本町4丁目の高知重工ホール(県民文化ホール)で開かれた。支援団体の代表者2人が対談し、「ひきこもりは社会との関わり方を築くための過程。寄り添い、生きようとする声を聞いて」と呼びかけた。

全国でひきこもりの関係者を支える「市民の会エス

ポワール」の山田孝明代表(72)＝高知市＝と、困窮者を支えるNPOこうちネットホップ理事長で、高知県立大学福祉学部の田中きよむ教授(63)が7日に登壇した。

田中教授は、内閣府の2022年度調査で「ひきこもり状態の人」は全国に推計約146万人いると紹介。ひきこもりとホームレスの共通点は「経済的困窮だけでなく、家庭や職場、地域な

どで人間関係が損なわれ、心の居場所の貧困に直面している」とことと説いた。

山田代表は当事者を仏壇の本尊に例え、「家族の悩みを一身に背負っているように思える」と強調。就職や結婚などを押しつける社会の側に病理があるとし、「もがき悩み、自身を自分の言葉で語れるようになれば、人間的自立は始まっている」と訴えた。

研修会は、認定NPO法人「カンガルーの会」の主催。保育士や児童福祉関係者ら約60人が聴講した。

(横田幸成)